新刊紹介

遠藤由紀子著

『近代開拓村と神社
旧会津藩士及び
屯田兵の帰属意識の変遷』

田畑久夫

本書は平成十九年三月に本学大学院生活機構研究科に提出された博士論文「近代開拓村における帰属意識の変遷に関する研究―旧会津藩士および屯田兵と神社の関係から―」を骨子とし、それに若干の加筆・修正を加えて出版された。著者遠藤由紀子さんは、本学において学部、大学院前期博士（修士）課程、後期博士課程を最短で進まれ勉学に集中された。遠藤さんは、学部の卒業論文から修士論文、博士論文と一貫して北海道に設置された屯田兵村を中心とする近代開拓村と神社との関係を論求されてきた。その長年にわたる研究成果が本書のもととなった博士論文として結実したのであった。遠藤さんは東北人特有の粘りをもって研究に当たられた。そのような粘りによる研究成果が本書の至る箇所にみられ、遠藤さんの性格が非常によく現われている好著であるといえよう。

以上述べたように、本書は遠藤さんの学問的な特徴が全面的に出ているのであるが、かような特徴はまさに遠藤さんの性格そのものでもある。このような特徴がみられる本書を紹介していこう。

本書は序章、本論（第一章から第七章）、終章からなる合計九つの章から構成され、その後にあとがき、参考文献・引用文献、ABSTRACT、索引が付けられている。

序章は、問題提起、本書の対象と目的など五項目から成っている。最初に「人々は日々の生活のなかで、神を様々な困難を乗り越えていくための支えとし、また感謝し生活を送っていた。それは心の拠り所となり、生きていく源となっていたといえる。近代開拓村における人々にとっての神社の存在とは何であったのか」（六頁）と問題提起が明確に示され、近代開拓村の事例として屯田兵村が対象とされる。かかる問題提起に対し、神社が屯田兵を中心とする入植者にとって、どのような役割や機能を担っていたのかを分析・検討する中で、明治期の近代国家形成期を生きた人々の精神面を解明したいという目的が述べられている。

第一章では、本テーマに関する従来の先行業績を丁寧に収集し、その整理を行なうとともに、かかる学問分野における本書の位置づけを論述している。そこでは、本書の目的を達成するために、特に学際的研究の必要性が強調されている。

第二章から第七章までの六つの章は、本論と称すべき本書の核心となっている章である。各章は、屯田兵を中心とする入植者の事例研究に基づいた研究である点が共通している。第二章は幕末期から明治初期にかけての会津藩士と神社との関係を、北海道大学附属図書館に所蔵されていたこれまで使用されたことのない新史料を用いて詳しく分析したという特色がみられる。第三章では、屯田兵村として初期に設置された琴似兵村、江別兵村が事例として取りあげられた。これらの両屯田兵村

2008年10月10日発行
御茶の水書房
菊判　304頁
定価 5600円（本体）

は屯田兵として札幌地域に入植した旧会津藩士を調査対象としたもので、旧会津藩士のその後の動向を追証するとともに、両屯田兵村内に設置された神社の勧請過程や祭神などの比較を行なった。

続く第四章から第七章では、前二章で実施した旧会津藩士の動向から離れて、屯田兵村と神社との問題に焦点をしぼり、論が展開されている。理由は、屯田兵の募集が当初旧会津藩に代表される士族籍を有する者に限定されていた。しかし、明治二十三年（一八九〇）の「屯田兵条例」の改正により、平民籍の者でも屯田兵となることが可能となったからである。第四章では、士族屯田兵の入植地として、札幌周辺に位置する山鼻兵村、新琴似兵村、篠路兵村の三屯田兵村が対象とされた。これら三屯田兵村の現地調査から札幌周辺に形成された士族屯田兵村における神社の特色と入植した屯田兵の帰属意識が分析・検討されている。第五章では、同様に士族屯田兵村の入植地として、道東の根室地域に形成された和田兵村と太田兵村の二屯田兵村が選ばれ、分析・検討がなされた。第六章では、第四章および第五章が士族屯田兵村に関しての検討であったのに対し、士族屯田と平民屯田が混在して形成された石狩川流域地域の十一の屯田兵村について、屯田兵と神社との関係を知るためにそれぞれの神社の「創立由縁」に注目し、屯田兵と神社との解明を行なった。第七章では、平民屯田の入植地の事例として、北見・上湧別地域に形成された端野兵村、野付牛兵村、相内兵村、湧別兵村、上湧別兵村の合計五屯田兵村が選定された。これらの五屯田兵村は「屯田兵制度」の終末期に形成されたので、北方警備よりも開拓に重点が置かれたという特色を有していた。これらの各屯田兵村における神社の歴史などから、入植した屯田兵の帰属意識を中心に論が進められた。

終章では、本書の結論を大きく以下の二点にまとめている。すなわち、第一点として、各章で論証された各地域の屯田兵村に設置・鎮座した神社に関して、各種の古文書類、祭神、立地条件などを、多角的に比較・分析することにより、それぞれの屯田兵村に入植した屯田兵の帰属意識の解明ができたこと。第二点として、屯田兵村のフィールドワークを通して近代開拓村における入植者の帰属意識に関して、入植の時期や身分により類型化を試み、その変遷を明確にしたこと、の二点である。

以上の各章の簡単な紹介で判明するように、本書は屯田兵村に代表される近代開拓村と神社との関係を、現地での数回にもわたる詳細なフィールドワークで収集した成果を至る所に盛り込んだ非常に意欲的な研究であると高く評価することができる。しかも、研究手法には歴史地理学および歴史学にとどまらず、民俗学、社会学など関連諸科学分野の研究手法にも大いに注目した学際的な研究であるといえよう。この点に関しては、本書二〇頁で論じられているように、歴史学研究者間で「新しい歴史学」と称されているフランスではじまったアナール学派の歴史学的手法に著者が非常に造詣が深いことに起因するかも知れない。

以上紹介してきたように、本書は近年における歴史地理学や歴史学のみならず多くの社会科学の研究分野で注目を浴びている学際的研究である。学際的研究は今後歴史地理学や歴史学など社会科学の新しい潮流となると推察できる。そのような意味からも大学院生を筆頭に歴史地理学や歴史学専攻に進みたいと願っている学部学生にも最適の研究書であるといえる。

なお、著者遠藤さんは本書にみられる立派な学術的業績の他に、幕末を中心とする新進気鋭の歴史小説家としても知られており、また、二〇〇九年に福島民報社より「福島民報出版文化奨励賞」を本書によって受賞された。

（たばた　ひさお　歴史文化学科）